

JSL学習者のコミュニケーション・ストラテジーの使用様相

－ 回顧的アンケート調査の分析から －

安芝恩*

〈 Abstract 〉

Aspects of using communication strategies of JSL learners:

An analysis of retrospective questionnaire survey

Not only in Korea, but also in Japan, there is a growing interest in the communicative competence of foreign language learners. In this social situation, JSL learners who are learning Japanese as a second language in Japan are using various types of Communication Strategies (CSs) to appropriately express their opinions in various Japanese contact environments.

This study conducted a retrospective questionnaire survey of JSL learners on ①CSs that are adopted to properly indicate the speaker's expression intentions and ②CSs that are adopted when it is difficult to convey the speaker's expression intention appropriately. As a result of cross-aggregation, based on the use of Excel, the JSL learner's perception of using ① and ② showed similar patterns regardless of the period of their stay in Japan, the period of studying Japanese, the self-assessment of their Japanese proficiency level, and JLPT level.

In particular, in both cases ① and ② many learners chose [b. Use English], [d. Confirm meanings with the listener], [g. Think carefully], [h. Use words with similar meanings], [j. Express with gestures], [k. Convey what you wanted to say using electronic devices].

Field : Japanese Education

Keywords : Communicative Competence, Communication Strategies, CS, JSL Learners

1. はじめに

1.1 研究背景

近年、コミュニケーション能力(Communicative Competence)が重視される動きに伴い、韓国では2006年よりTOEIC Speakingテストが開始された。また、2007年よりSJPT(Spoken Japanese Proficiency Test)が実施され、韓国での語学試験に話す能力が評価される変化が見られた。以降、日本国内でも語学試験に話す能力が評価される変化が見られ、2016年よりTOEIC Speakingテストが開始されたことはもちろん、2016年より日本の英検にもスピーキング・テストが導入されるようになっ

* 九州大学大学院 大学院生、日本語教育

た。

2016年4月からは、国立国語研究所によって「外国語として日本語を学ぶ学習者のコミュニケーションの実態を解明し、それを学習者の支援に役立てる¹⁾」ことを目的に「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」という研究が開始された。同じく、国立国語研究所による「多言語母語の日本語学習者横断コーパス, I-JAS(International Corpus of Japanese as a Second Language)」が開発され、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究が注目を集めた。迫田(2016:23)で指摘されているように、学習者の言語使用の実態を把握することはより良い研究や指導への第一歩である。

「新しい「日本語能力試験」」は、直接、日本語学習者のコミュニケーション能力を評価する試験ではないが、改定以来、「日本語に関する知識とともに実際に運用できる日本語能力を重視」(独立行政法人国際交流基金、財団法人日本国際教育支援協会、2009:4)し、課題遂行のための言語コミュニケーション能力(「言語知識」、「読解」、「聴解」)(独立行政法人国際交流基金 2010)を測定している。

1.2 研究目的

そこで、本研究では、第二言語としての日本語(Japanese as a Second Language, JSL)環境にある日本語学習者が、普段の生活の中で話し手、または、聞き手として自身の言いたいことをうまく伝えるために、どのように対処しているのかを明らかにすることを目的とした。日本語学習者の言語使用の実態を把握すること(迫田 2016)によって日本語学習者はもちろん、日本語教育機関の関係者への支援に一助となることを期待する。

2. 先行研究

2.1 コミュニケーション能力に関する研究

コミュニケーション能力(Communicative competence)についての研究は、1970年代から始まり、Hymes(1972)、Canale & Swain(1980)、Canale(1983)などによって研究されてきた。コミュニケーション能力(Communicative Competence)は、コミュニケーションに必要な意識的知識と無意識的知識とのスキルの基礎となるシステムの統合(Canale & Swain,1980; Canale,1983)と捉えて、大きく、文法能力(Grammatical Competence)、社会言語能力(Sociolinguistic Competence)、談話能力(Discourse Competence)、方略的能力(Strategic Competence)の4つの能力に分類されている。サヴィニョン(2016)では、これらのコミュニケーション能力(Communicative competence)の4つの能力について互いに影響しあった結果、総合的なコミュニケーション能力が伸びると言及している。Canale(1983)では、方略的能力(Strategic Competence)を、文法能力(Grammatical Competence)、社会言語能力(Sociolinguistic Competence)、談話能力(Discourse Competence)と統合し、実際の言語使用場面で運用する能力であると定義している。サヴィニョン(2016)とCanale(1983)の言及からも分かるように、方略的能力は、コミュニケーション能力(Communicative Competence)において欠かせない能力である。

1) 国立国語研究所 <https://www.ninjal.ac.jp/research/project-3/institute/analyze-communication> より引用。

2.2 方略的能力とコミュニケーション・ストラテジーに関する研究

方略的能力は、2.1で述べたように、コミュニケーション・ストラテジー(Communication Strategies, CS)の運用を通して捉えられるものであるが、このCSについては、Tarone(1980), Faerch & Kasper (1983), Ellis (1985)の研究が知られている。彼らは、CSをコミュニケーションに何らかの問題が生じたときに使用するという面では共通認識を持っている。しかし、Tarone(1980)は、CSを必要な意味構造のための対話者2人の相互の試みと捉えている。一方、Faerch&Kasper(1983)は、CSを問題解決のための潜在的で意識的な計画と捉えている。また、Ellis(1985)は、CSを言語使用者のコミュニケーション能力の一部として存在する心理言語的計画と捉えている。一方、独立行政法人国際交流基金(2009, 2010)では、言語能力と言語活動をつなぐ役割と定義している。

しかし、Council of Europe(2001:57) では、CSについて「言語使用者が自分の知的資源を動員し、バランスをとり、技能を活性化し、手順を決めるための手段²⁾」であるため、「単に言語が不完全であるとか、コミュニケーションができないことを補償する方法、能力としてみなしてはならない³⁾」と指摘されている。

2.3 学習者のCSに関する研究

まず、CSの捉え方については、研究によって大きく2つに分かれており、会話において何らかの問題を解決するための方略(宋 2015, 許 2010)と捉えている研究と、会話を維持・続行するためのCS(市川 2009, 和泉ほか 2005)と捉えてCSを分析した研究がある。

次に、語学能力の観点から、学習者のCS使用を言語能力の不足が影響、日本語レベルの問題だと認識(許 2010, 方 2010)した研究がある。

さらに、CSに関する研究は、会話分析手法を用いた研究(荻原 1996, 方 2010, エミ 2012, 宋 2015, 安 2016, 2017)が多く行われているが、その中でも、許(2014)、宋(2015)と安(2016, 2017)とではフォローアップ・インタビュー(Follow Up Interview, FUI)が行われ、学習者はより円滑なコミュニケーションを行うためCSを使用しているという実態やCS使用の理由が言語能力不足だけでなく心理的要因が関わっている可能性があることが示唆されている。また、安(2016:7)で指摘されているように、「C006:そして、いろいろな、いろんなものを選んでレジへ行きました」の発話例では、言語知識の不足によるCS使用と「C006:会計するとき、突然、お金が足りないということに気づきました」の発話例では、CS使用が見られなかったと判断する可能性がある。しかし、FUIから学習者のCS使用、または、気づきにくいCS使用は、問題を解決するためのCS使用でなく、円滑な会話のために使われたCSだったと報告されている。

2.4 研究課題

従来のCS研究は、文法能力に焦点(Council of Europe, 2001)を当て、学習者のCSを分析した研究が主流であったため、CSを、学習者が会話場面において何らかの問題を解決するために取る方略と捉えている研究が多かった。そのため、実証研究で分析されている学習者のCS使用と学習者が認識しているCS使用においては、安(2016)でも指摘されているように、何らかの認識のずれが生じる可能性があ

2) Council of Europe (2001) p.57, 訳は、吉島ほか(2004) p.60-61より引用。

3) Council of Europe (2001) p.57, 訳は、吉島ほか(2004) p.61より引用。

る。そこで、学習者のCS使用が、円滑な会話のためなのか問題を解決するためなのかを把握する必要がある。

そこで、本研究ではTarone(1980)と方(2010)のCSの分類に基づいて、次の2つの研究課題を設定した。まず、JSL学習者は日本語で言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためにどのようなCSを使用していると認識しているのか。次に、JSL学習者は日本語で言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときどのようなCSを使用していると認識しているのかを検討する。詳しくは、JSL学習者の日本滞在期間・日本語学習期間・日本語レベルの自己評価・JLPTレベルという観点に加え、CSの種類の内いずれかを選択したJSL学習者は、ほかにどのようなCSの種類を使用していると認識しているのかを検討する。

本研究でのコミュニケーションは、JSL学習者が様々な生活場面(公的場面、私的場面、教育場面、職場場面など、Council of Europe, 2001)で使用している日本語での会話を言う。また、第二言語として日本語を学習している日本語学習者をJSL学習者と言う。

3. 研究方法

3.1 調査対象

調査対象は、日本の日本語教室、日本語学校、大学、大学院などの日本語教育機関で日本語を学習しているJSL学習者である。JSL学習者は前述の通り、第二言語として日本語を学習している日本語学習者のことである。

3.2 調査方法

調査は、Googleフォームによる回顧的アンケート調査を実施した。主な質問項目は、①普段、日本語で言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためにあなたはどのようにしますか。②普段、日本語で言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないとき、あなたはどのようにしますかの2点である。選択肢については、〈表1〉に示した通りで、いずれも、複数選択可能である。〈表1〉の選択肢は、Tarone(1980)と方(2010)のCSの分類を参照し作成したものである。Tarone(1980:429)では、CSを大きく、Paraphrase(Approximation, Word coinage, Circumlocution)、Transfer(Literal translation, Language switch, Appeal for assistance, Mime)、Avoidance(Topic avoidance, Message abandonment)に分類している。一方、方(2010:124)では、さらに詳しく分類されており、大きく、達成CS(言語CS(自己解決型CS、他者協力型CS)、非言語CS(自己解決型CS、他者協力型CS))と達成促進CSに分類している。それぞれの下位分類として、[他言語借用、外国語化、造語、繰り返し、置き換え、再編成、解釈、直接的な協調要請、間接的な協調要請、聞き返し、図示、道具の借用、実物で明示、ジェスチャー、困難を示した表情・視線・しぐさ、ためらい・時間稼ぎ]のようなCSが分類されている。

〈表1〉 JSL学習者が使用していると認識しているCS

	JSL学習者が使用していると認識しているCS
a	母語を使用する
b	英語を使用する
c	分からないことを伝える
d	相手に意味を確認する
e	話題を変える
f	メッセージを放棄する
g	じっくり考える
h	意味の似たような言葉を使う
i	繰り返して言う
j	ジェスチャーで伝える
k	電子機器を利用して言いたいことを伝える
l	筆記用具で言いたいことを伝える
m	日本語に支障がないため何もしない
n	その他

3.3 分析方法

Googleフォームによる回顧的アンケート調査に回答した調査対象者の中で、有効な回答をした81名の回答を分析の対象とし、Excelのピボットテーブルを用い、クロス集計を行った。適宜、分析結果はグラフを用いて示した。調査に回答したJSL学習者の国籍は、中国・台湾・タイ・ネパール・バングラデシュ、パキスタン・ベトナム・その他で、母語は中国語・ビン南語・モンゴル語・タイ語・英語・ネパール語・オランダ語・ウルドゥー語・カンボジア語・ベンガル語等であった。日本滞在期間は1.5年以下が78名、2.5年~4年が3名であり、日本語学習期間は2年以下が67名、2年~4年が13名、その他が1名であった。また、日本語レベルの自己評価においては、上3名・中38名・下40名であった。JLPTの取得においては、N1~N5(旧1級~旧4級を含む)を取得している人が47名、取得していない人が34名であった。

4. 調査結果及び分析

4.1から4.4までは、JSL学習者の〔日本滞在期間×①言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためのCS〕、〔日本滞在期間×②言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときのCS〕、〔日本語学習期間×①言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためのCS〕、〔日本語学習期間×②言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときのCS〕、〔日本語レベルの自己評価×①言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためのCS〕、〔日本語レベルの自己評価×②言いたいことを会

話の相手にうまく伝えることができないときのCS]、[JLPTレベル×①言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためのCS]、[JLPTレベル×②言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときのCS]のクロス集計の結果である。

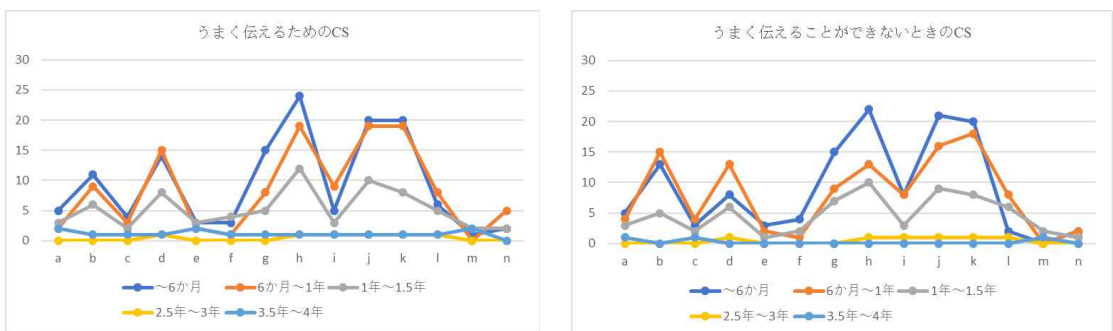
また、4.5と4.6は[①言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためのCS×①言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためのCS]、[②言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときのCS×②言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときのCS]のクロス結果であり、CSの種類の中からいずれかを選択したJSL学習者は、ほかにどのようなCSの種類を使用していると認識しているのかについての結果である。

4.1 JSL学習者の日本滞在期間におけるCS使用についての回顧

JSL学習者の日本滞在期間におけるCS使用についての回顧の結果を〈図1〉に示した。①言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためのCSの結果では、日本滞在期間が[~6か月、6か月~1年、1年~1.5年]のJSL学習者は、[b. 英語を使用する、d.相手に意味を確認する、g.じっくり考える、h.意味の似たような言葉を使う、j. ジェスチャーで伝える、k.電子機器を利用して言いたいことを伝える]を選択した人が多かった。一方、日本滞在期間が[2.5年~3年、3.5年~4年]のJSL学習者は、全てのCSの選択肢において0~2名以下が選択している。

②言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときのCSの結果では、日本滞在期間が[~6か月、6か月~1年、1年~1.5年]のJSL学習者は、[b. 英語を使用する、d.相手に意味を確認する、g.じっくり考える、h.意味の似たような言葉を使う、j. ジェスチャーで伝える、k.電子機器を利用して言いたいことを伝える]を選択した人が多かった。一方、日本滞在期間が[2.5年~3年、3.5年~4年]のJSL学習者は、全てのCSの選択肢において0~1名以下が選択している。

〈図1〉の結果から、①と②のいずれの場合にも、日本滞在期間の年数が1.5年以下は、何らかのCSを使用していると回答した人が多い反面、2.5年以上は、少ないことが分かった。



〈図1〉 JSL学習者の日本滞在期間におけるCS使用

しかし、〈表2〉を見て分かるように、日本滞在期間が[2.5年~3年]であるJSL学習者が1名、[3.5年~4年]であるJSL学習者が2名で少なかったからである。

〈表2〉 日本滞在期間の人数(n=81)

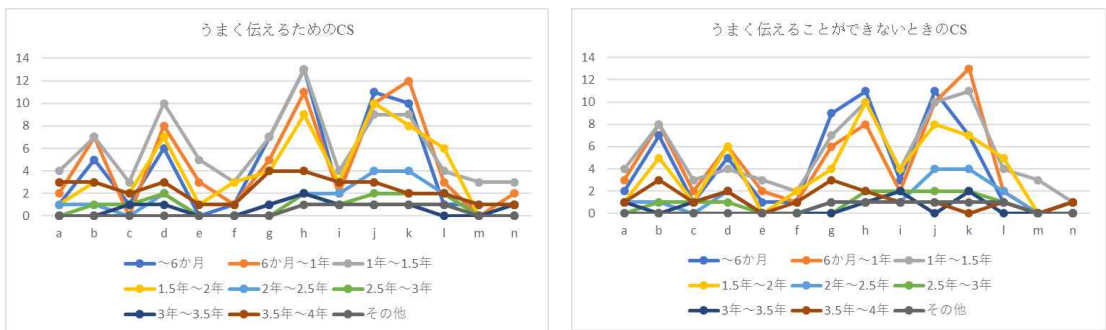
日本滞在期間	人数
～6か月	33
6か月～1年	28
1年～1.5年	17
2.5年～3年	1
3.5年～4年	2
計	81

4.2 JSL学習者の日本語学習期間におけるCS使用についての回顧

JSL学習者の日本語学習期間におけるCS使用についての回顧の結果を〈図2〉に示した。①言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためのCSの結果では、日本語学習期間が〔～6か月、6か月～1年、1年～1.5年、1.5年～2年〕のJSL学習者は、〔b. 英語を使用する、d.相手に意味を確認する、g.じっくり考える、h.意味の似たような言葉を使う、j. ジェスチャーで伝える、k.電子機器を利用して言いたいことを伝える〕を選択した人が多かった。一方、日本語学習期間が〔2年～2.5年、2.5年～3年、3年～3.5年、3.5年～4年、その他〕のJSL学習者は、全てのCSの選択肢において0～4名以下が選択している。

②言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときのCSの結果では、日本語学習期間が〔～6か月、6か月～1年、1年～1.5年、1.5年～2年〕のJSL学習者は、〔b. 英語を使用する、d.相手に意味を確認する、g.じっくり考える、h.意味の似たような言葉を使う、j. ジェスチャーで伝える、k. 電子機器を利用して言いたいことを伝える、l.筆記用具で言いたいことを伝える〕を選択した人が多かった。一方、日本語学習期間が〔2年～2.5年、2.5年～3年、3年～3.5年、3.5年～4年、その他〕のJSL学習者は、全てのCSの選択肢において0～4名以下が選択している。

〈図2〉の結果から、①と②のいずれの場合にも、日本語学習期間の年数が2年以下は、何らかのCSを使用していると回答した人数が多い反面、2年以上は、何らかのCSを使用していると回答した人数が少ないことが分かった。



〈図2〉 JSL学習者の日本語学習期間におけるCS使用

しかし、〈表3〉を見て分かるように、日本語学習期間が2年以上であるJSL学習者の人数が2年以下であるJSL学習者数に比べて少なかったからである。

〈表3〉 日本語学習期間の人数(n=81)

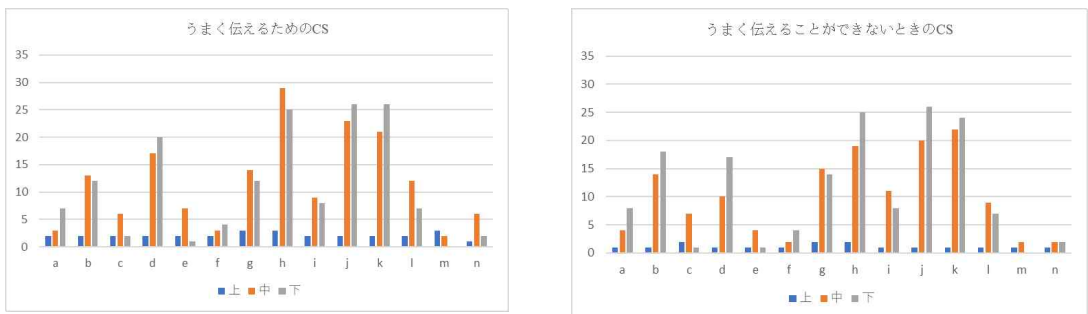
日本語學習期間	人数
～6か月	17
6か月～1年	18
1年～1.5年	20
1.5年～2年	12
2年～2.5年	4
2.5年～3年	2
3年～3.5年	2
3.5年～4年	5
その他	1
計	81

4.3 JSL学習者の日本語レベルの自己評価におけるCS使用についての回顧

JSL学習者の日本語レベルの自己評価におけるCS使用についての回顧の結果を〈図3〉に示した。①言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためのCSの結果では、日本語レベルの自己評価が[中、下]のJSL学習者は、[b. 英語を使用する、d.相手に意味を確認する、g.じっくり考える、h.意味の似たような言葉を使う、j. ジェスチャーで伝える、k.電子機器を利用して言いたいことを伝える、l.筆記用具で言いたいことを伝える]を選択した人が多かった。一方、日本語レベルの自己評価が[上]のJSL学習者は、全てのCSの選択肢において1～3名が選択している。

②言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときのCSの結果では、日本語レベルの自己評価が[中、下]のJSL学習者は、[b. 英語を使用する、d.相手に意味を確認する、g.じっくり考える、h.意味の似たような言葉を使う、j. ジェスチャーで伝える、k.電子機器を利用して言いたいことを伝える]を選択した人が多かった。一方、日本語レベルの自己評価が[上]のJSL学習者は、全てのCSの選択肢において1～2名が選択している。

〈図3〉の結果から、①と②のいずれの場合にも、日本語レベルの自己評価が[中、下]の場合は、何らかのCSを使用していると回答した人が多い反面、[上]は、何らかのCSを使用していると回答した人数が少ないことが分かった。



〈図3〉 JSL学習者の日本語レベルの自己評価におけるCS使用

しかし、〈表4〉を見て分かるように、日本語レベルの自己評価が [上] であるJSL学習者の人数が3名で [中、下] のJSL学習者の人数に比べるとかなり少なかったからである。

〈表4〉 日本語レベルの自己評価(n=81)

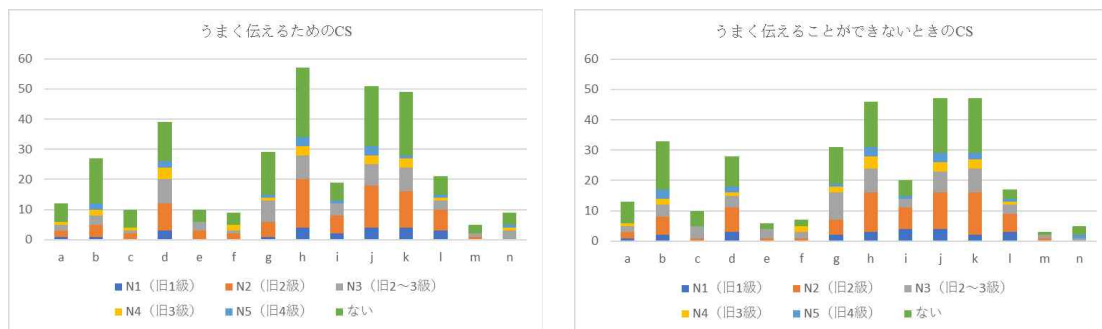
日本語レベルの自己評価	人数
上	3
中	38
下	40
計	81

4.4 JSL学習者のJLPTレベルにおけるCS使用についての回顧

JSL学習者のJLPTレベルにおけるCS使用についての回顧の結果を〈図4〉に示した。①言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためのCSの結果では、JLPTレベルが [N2(旧2級)、ない] のJSL学習者の選択が目立って見える。CS種類の全体から見ると、[b. 英語を使用する、d.相手に意味を確認する、g.じっくり考える、h.意味の似たような言葉を使う、i.繰り返して言う、j. ジェスチャーで伝える、k.電子機器を利用して言いたいことを伝える、l.筆記用具で言いたいことを伝える] を選択した人が多かった。

②言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときのCSの結果でも、JLPTレベルが [N2(旧2級)、ない] のJSL学習者が目立って見える。CS種類の全体から見ると、[b. 英語を使用する、d.相手に意味を確認する、g.じっくり考える、h.意味の似たような言葉を使う、i.繰り返して言う、j. ジェスチャーで伝える、k.電子機器を利用して言いたいことを伝える、l.筆記用具で言いたいことを伝える] を選択した人が多かった。

〈図4〉の結果から、①と②のいずれの場合にも、JLPTレベルが [N2(旧2級)、ない] の場合の回答が多かった。



〈図4〉 JSL学習者のJLPTレベルにおけるCS使用

これは、〈表5〉を見て分かるように、JLPTレベルが [N2(旧2級)、ない] に集中していたからである。

〈表5〉 JLPTレベルの人数(n=81)

JLPTレベル	人数
N1(旧1級)	5
N2(旧2級)	21
N3(旧2~3級)	12
N4(旧3級)	4
N5(旧4級)	5
ない	34
計	81

4.5 言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためのCS間のクロス集計

〈表6〉は、〔①言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためのCS×①言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためのCS〕のクロス集計の結果である。20人以上が選択したCSに、ピンク色で表した。

[b. 英語を使用する]を選択した人のうち、[b. 英語を使用する、h.意味の似たような言葉を使う、j. ジェスチャーで伝える]を選択した人は、それぞれ27名、21名、20名であった。[d.相手に意味を確認する]を選択した人のうち、[d.相手に意味を確認する、h.意味の似たような言葉を使う、j. ジェスチャーで伝える、k.電子機器を利用して言いたいことを伝える]を選択した人は、それぞれ39名、31名、32名、30名であった。[g.じっくり考える]を選択した人のうち、[g.じっくり考える、h.意味の似たような言葉を使う]を選択した人は、それぞれ29名、25名であった。

[h.意味の似たような言葉を使う]を選択した人のうち、[b. 英語を使用する、d.相手に意味を確認する、g.じっくり考える、h.意味の似たような言葉を使う、j. ジェスチャーで伝える、k.電子機器を利用して言いたいことを伝える]を選択した人は、それぞれ21名、31名、25名、57名、42名、37名であった。[j. ジェスチャーで伝える]を選択した人のうち、[b. 英語を使用する、d.相手に意味を確認する、h.意味の似たような言葉を使う、j. ジェスチャーで伝える、k.電子機器を利用して言いたいことを伝える]を選択した人は、それぞれ20名、32名、42名、51名、39名であった。

[k.電子機器を利用して言いたいことを伝える]を選択した人のうち、[d.相手に意味を確認する、h.意味の似たような言葉を使う、j. ジェスチャーで伝える、k.電子機器を利用して言いたいことを伝える]を選択した人は、それぞれ30名、37名、39名、49名であった。[l.筆記用具で言いたいことを伝える]を選択した人のうち、[l.筆記用具で言いたいことを伝える]を選択した人は21名であった。

〈表6〉 言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためのCS(n=81)

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n
a	12	4	2	6	3	3	6	6	4	5	5	3	3	1
b	4	27	6	15	3	4	8	21	5	20	17	7	2	7
c	2	6	10	9	4	3	7	10	5	10	8	5	2	5
d	6	15	9	39	5	5	18	31	10	32	30	17	2	9
e	3	3	4	5	10	4	5	6	4	6	8	4	3	1

f	3	4	3	5	4	9	4	6	3	7	5	4	2	1
g	6	8	7	18	5	4	29	25	9	19	18	8	3	5
h	6	21	10	31	6	6	25	57	16	42	37	17	3	8
i	4	5	5	10	4	3	9	16	19	16	15	10	2	2
j	5	20	10	32	6	7	19	42	16	51	39	19	2	7
k	5	17	8	30	8	5	18	37	15	39	49	19	2	3
l	3	7	5	17	4	4	8	17	10	19	19	21	2	2
m	3	2	2	2	3	2	3	3	2	2	2	2	5	1
n	1	7	5	9	1	1	5	8	2	7	3	2	1	9
計	63	146	86	228	66	60	164	285	120	275	255	138	34	61

4.6 言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときのCS間のクロス集計

〈表7〉は、〔②言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときのCS×②言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときのCS〕のクロス集計の結果である。20人以上が選択したCSに、ピンク色で表した。

〔b. 英語を使用する〕を選択した人のうち、〔b. 英語を使用する、j. ジェスチャーで伝える、k. 電子機器を利用して言いたいことを伝える〕を選択した人は、それぞれ33名、22名、20名であった。〔d. 相手に意味を確認する〕を選択した人のうち、〔d. 相手に意味を確認する、j. ジェスチャーで伝える、k. 電子機器を利用して言いたいことを伝える〕を選択した人は、それぞれ28名、21名、20名であった。

〔g. じっくり考える〕を選択した人のうち、〔g. じっくり考える、h. 意味の似たような言葉を使う、j. ジェスチャーで伝える〕を選択した人は、それぞれ31名、22名、20名であった。〔h. 意味の似たような言葉を使う〕を選択した人のうち、〔g. じっくり考える、h. 意味の似たような言葉を使う、j. ジェスチャーで伝える、k. 電子機器を利用して言いたいことを伝える〕を選択した人は、それぞれ22名、46名、34名、30名であった。

〔i. 繰り返して言う〕を選択した人のうち、〔i. 繰り返して言う〕を選択した人は、20名であった。

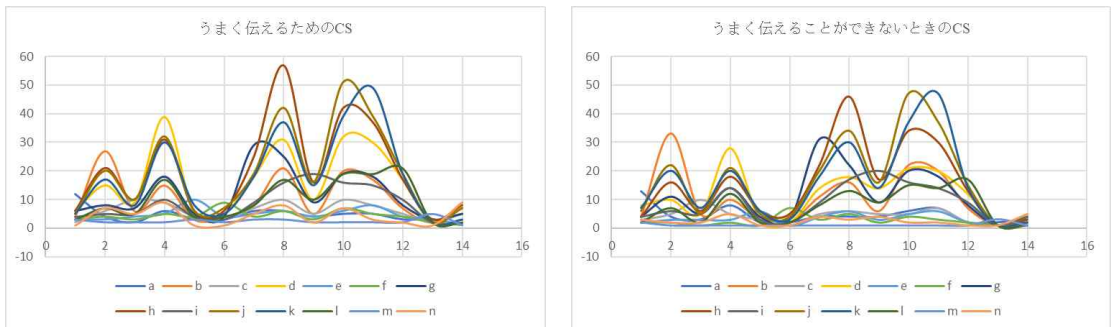
〔j. ジェスチャーで伝える〕を選択した人のうち、〔b. 英語を使用する、d. 相手に意味を確認する、g. じっくり考える、h. 意味の似たような言葉を使う、j. ジェスチャーで伝える、k. 電子機器を利用して言いたいことを伝える〕を選択した人は、それぞれ22名、21名、20名、34名、47名、37名であった。

〔k. 電子機器を利用して言いたいことを伝える〕を選択した人のうち、〔b. 英語を使用する、d. 相手に意味を確認する、h. 意味の似たような言葉を使う、j. ジェスチャーで伝える、k. 電子機器を利用して言いたいことを伝える〕を選択した人は、それぞれ20名、20名、30名、37名、47名であった。

〈表7〉 言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときのCS(n=81)

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n
a	13	4	3	8	2	2	4	4	4	6	7	2	2	3
b	4	33	5	10	3	2	11	16	6	22	20	7	1	2
c	3	5	10	5	3	1	5	6	5	5	7	2	1	2
d	8	10	5	28	3	2	14	18	14	21	20	12	1	5
e	2	3	3	3	6	1	4	6	3	5	6	2	1	1
f	2	2	1	2	1	7	3	5	2	4	3	2	1	1
g	4	11	5	14	4	3	31	22	9	20	18	8	1	4
h	4	16	6	18	6	5	22	46	17	34	30	13	1	3
i	4	6	5	14	3	2	9	17	20	16	14	9	1	4
j	6	22	5	21	5	4	20	34	16	47	37	15	1	2
k	7	20	7	20	6	3	18	30	14	37	47	14	1	2
l	2	7	2	12	2	2	8	13	9	15	14	17	1	1
m	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	1
n	3	2	2	5	1	1	4	3	4	2	2	1	1	5
計	64	142	60	161	46	36	154	221	124	235	226	105	17	36

〈表6〉と〈表7〉のクロス集計の結果を、〈図5〉の散布図(平滑線)に示した。①言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためのCSと②言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときのCS、それぞれを選択した人数とでは、全体的に、[b. 英語を使用する]、[d.相手に意味を確認する]、[g.じっくり考える]、[h.意味の似たような言葉を使う]、[j. ジェスチャーで伝える]、[k.電子機器を利用して言いたいことを伝える]を選択した人の波が目立って見える。



〈図5〉 うまく伝えるためのCSとうまく伝えることができないときのCSの散布図(平滑線)

この結果は、4.1から4.4までの、JSL学習者の日本滞在期間・日本語学習期間・日本語レベルの自己評価・JLPTレベルにおけるCS使用を選択した人と類似の傾向が見られた。

5. 考察

結果の分析から、まず、JSL学習者の日本滞在期間においても、JSL学習者の日本語学習期間においても、その期間が短いほうが [b. 英語を使用する]、[d.相手に意味を確認する]、[g.じっくり考える]、[h.意味の似たような言葉を使う]、[j. ジェスチャーで伝える]、[k.電子機器を利用して言いたいことを伝える] のようなCSを使用していると回答した人数が多かった。また、日本語レベルの自己評価においては、[中]と[下]と回答したJSL学習者のほうが[上]と回答したJSL学習者より [b. 英語を使用する]、[d.相手に意味を確認する]、[g.じっくり考える]、[h.意味の似たような言葉を使う]、[j. ジェスチャーで伝える]、[k.電子機器を利用して言いたいことを伝える] のようなCSを使用していると回答した人数が多かった。JSL学習者のJLPTレベルにおいても類似のCS使用認識の傾向が見られた。しかし、本研究ではJSL学習者の日本滞在期間が長い人の数、日本語学習期間が長い人の数、日本語レベルの自己評価が[上]である人の数が少数であったことが影響している可能性があると言える。特に、日本滞在期間においては、許(2010)でも指摘されているように、日本滞在期間の長さより日本滞在期間中の言語能力の変化がCS使用に影響している可能性がある。

次に、[a.母語を使用する]、[c.分からないことを伝える]、[e.話題を変える]、[f.メッセージを放棄する] のようなCSを使用していると回答した人の数が少ないことから、JSL学習者は普段の生活で、言いたいことを会話の相手にうまく伝えるために、または、うまく伝えることができないときに、話し手、または、聞き手として、会話の相手との円滑なコミュニケーションを意識して何らかのCSを使用し日本語での意思疎通を図っている可能性があると考えられる。

さらに、①言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためのCS間のクロス集計、②言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときのCS間のクロス集計の結果から、JSL学習者はいずれの場合にも使用していると回答したCSの種類においては類似の傾向が見られた。このことは、CSを単に何らかの問題が生じた際に話し手が取る方略とは言いがたい(Council of Europe 2001, 安 2016, 2017)と言える。そのため、JSL学習者が、円滑な会話のためにCSを使用しているのか、または、問題を解決するためにCSを使用しているのかを把握する必要があると考えられる。

6. おわりに

6.1 まとめ

以上、本研究では、JSL学習者のコミュニケーション・ストラテジーの使用様相をJSL学習者の回顧的アンケート調査の分析を通して見てきた。JSL学習者の日本滞在期間・日本語学習期間・日本語レベルの自己評価・JLPTレベルにおけるCS使用についての回顧の結果と、①言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためのCS間のクロス集計、②言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときのCS間のクロス集計の結果を分析し検討を行った。研究課題でも述べたように、従来のCS研究は、

CSを、学習者が会話場面において何らかの問題を解決するために取る方略と捉えている研究が多かった。しかし、本研究の結果から、JSL学習者は日本語で言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためにも、日本語で言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときにもCSを使用していると認識していることが示唆された。また、使用していると認識しているCSの傾向には類似性が見られた。

6.2 今後の課題

本研究の成果は、JSL学習者のコミュニケーション・ストラテジーの使用様相をJSL学習者の視点から、彼らの普段の日本語使用におけるCS使用の認識を検討したことにある。しかし、本研究は、回路的アンケート調査であったため、JSL学習者の実際のコミュニケーション場面において、言いたいことを会話の相手にうまく伝えるためにどのようなCSが使用されたか、また、言いたいことを会話の相手にうまく伝えることができないときにはどのようなCSが使用されたかについての実証研究まではできなかった。そのため、今後は、回路的アンケート調査に加え、タスクを用いたインタビュー調査とFUI調査を行い、より考察を深めたい。

【参考文献】

- 安芝恩(2016)「JSL中国人中上級学習者の言い換えストラテジーに関する一考察」『地球社会統合科学研究』5 pp.1-11
- _____ (2017)「第二言語環境における中級及び上級日本語学習者の言い換えストラテジーについて」九州大学地球社会統合科学府 修士論文
- 和泉絵美, 内元清貴, 井佐原均(2005)「学習者コーパスからの表現バリエーションの抽出と言い換えストラテジー指導への利用」『自然言語処理』12(4) pp.193-210
- 市川ゆりえ(2009)「会話を維持するためのコミュニケーション・ストラテジー - 日本人英語学習者のスピーキング・テストにおける会話の分析 -」『言語情報科学』7 pp.97-107
- 一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会(IIBC)
<https://www.iibc-global.org/toEIC/test/speaking/about.html> (検索日: 2019.12.30)
- 英検 <https://www.eiken.or.jp/eiken/merit/> (検索日: 2019.12.30)
- エミ・インダー・プリヤンティ(2012)「接触場面における問題処理のコミュニケーション・ストラテジーに関する一考察 - インドネシア人日本語学習者の場合 -」『2012年第九回日本語教育・日本研究シンポジウム予稿集』pp.1-8
- 荻原稚佳子(1996)「日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー使用の縦断的研究」『講座日本語教育』31 pp.74-92
- 許挺傑(2010)「日本語学習者の発話ストラテジーについての一考察 - 第二言語習得環境にいる中上級学習者の縦断的データを用いて -」『筑波応用言語学研究』17 pp.111-124
- 許挺傑(2014)「接触場面における日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジーに関する研究」筑波大学 博士論文
- 国立国語研究所<https://www.ninjal.ac.jp/research/project-3/institute/analyze-communication/>(検索日: 2019.12.30)
- 迫田久美子(2016)「コーパスを利用した第二言語習得研究の可能性と課題 - 多言語母語の日本語学習者横断

- コーパス(I-JAS)の構築に向けて -」 『第二言語としての日本語の習得研究』 19 pp.5-27
- サンドラ・サヴィニョン著, 草野ハベル清子訳, 佐藤一嘉訳, 田中春美訳(2016) 『〈増補新版〉コミュニケーション能力 - 外国語教育の理論と実践 -』 法政大学出版局
- 宋佳音(2015) 「接触場面における会話の調整行動 - 中国人日本語学習者を中心に -」 言文62 pp.27-38
- 独立行政法人国際交流基金(2009) 「JF日本語教育スタンダード試行版」
- 独立行政法人国際交流基金(2010) 「JF日本語教育スタンダード2010利用者ガイドブック [第三版]」
- 独立行政法人国際交流基金, 財団法人日本国際教育支援協会(2009) 「あたらしい「日本語能力試験」」
- 方穎琳(2010) 「接触場面における中国人日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジーの使用 - 意味伝達問題を解決するための達成ストラテジーを中心に -」 『言語文化と日本語教育』 39 pp.122-131
- Canale, M. & Swain, M. (1980) Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing, *Applied Linguistics*, 1(1) pp.1-47
- Canale, M. (1983) From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy In J. C. Richards and R. W. Schmidt (Eds.), *Language and Communication*, London: Longman, pp.2-27
- Council of Europe (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press. (吉島茂、大橋理枝訳・編 (2004) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 東京: 朝日出版社)
- ETS TOEIC <http://exam.ybmnet.co.kr/toEIC/info/history.asp> (検索日: 2019.12.30)
- Faerch, C., & Kasper, G. (1983) Plans and strategies in foreign language communication. In Faerch, C., & Kasper, G. (Eds.), *Strategies in interlanguage communication*, New York: Longman, pp.20-60
- Hymes, D.H. (1972) *On communicative competence*. In Pride and Holmes.
- SJPT(Spoken Japanese Proficiency Test) (株)YBMNET http://exam.ybmnet.co.kr/sjpt/abo_profile.asp (検索日: 2019.12.30)
- Tarone, E. (1980) Communication strategies, foreigner talk, and repair in interlanguage. *Language Learning* 30(2) pp.417-431

〈 요 지 〉

JSL학습자의 커뮤니케이션 전략의 사용 양상

- 회고적 앙케이트 조사의 분석을 통하여 -

한국 뿐만 아니라 일본 국내에서도 외국어 학습자의 커뮤니케이션 능력에 대한 관심이 높아지고 있다. 이러한 사회적 상황 속에서, 일본에서 제2언어로서 일본어를 학습하고 있는 JSL 학습자는 다양한 일본어 접촉 환경에서 자신의 의사 표현을 적절하게 하기 위하여 다양한 종류의 커뮤니케이션 전략(CS)을 사용하고 있다.

본 연구는 JSL 학습자를 대상으로 하여 ①표현 의도를 적절하게 전달하기 위한 CS와 ②표현 의도를 적절하게 전달하기 어려운 경우에 사용하는 CS에 대한 회고적 앙케이트 조사를 실시하였다. Excel을 이용하여 크로스 집계 분석한 결과, JSL 학습자의 ①과 ②의 사용에 대한 인식에 있어서 JSL 학습자의 일본 체재 기간, 일본어 학습 기간, 일본어 레벨의 자기 평가, JLPT 레벨에서 유사한 양상을 보이고 있었다.

특히, ①과 ②의 어떤 경우에도, 'b.영어를 사용한다', 'd.청자에게 의미를 확인한다', 'g.곰곰이 생각한다', 'h.비슷한 의미의 표현을 사용한다', 'j.제스처로 전달한다', 'k.전자 기기를 이용하여 표현의도를 전달한다' 를 선택한 사람의 수가 많았다.

논문분야 : 일본어교육

키워드 : 커뮤니케이션 능력, 커뮤니케이션 전략, CS, JSL 학습자

■ 안지은(安芝恩)

九州大学大学院 大学院生

ashleyjeje80@gmail.com

■投稿日	:	2019년	12월	31일
■審査開始	:	2020년	2월	5일
■審査完了	:	2020년	2월	19일
■掲載確定	:	2020년	2월	28일